

意図と意図的行為の関係

佐藤 広大 (Kodai Sato)

慶應義塾大学

私は今、発表要旨を作成することを制御している、つまり、意図的に作成している。このとき、なぜ、私は発表要旨を意図的に作成していると言えるのだろうか。最初に思い浮かぶ答えは、私は発表要旨を作成するつもりだったから、つまり、作成することを意図していたからだというものだろう。この答えは、意図についての「単純な説 (the simple view)」と呼ばれるもので、次のように定式化できる。

(単純な説) ある行為者が意図的に ϕ するならば、 ϕ することを意図していた。

しかし、単純な説に対して様々な反例が提出されてきた。そうした事例のなかでも有名なものの一つが M・ブラットマンが提出した「ゲーム事例」である。

(ゲーム事例) 標的にミサイルを当てるゲームが二つある。ただし、二つのゲームのミサイルが同時に標的に当たりそうになるとゲームが止まり、どちらの標的にも当てることができなくなる。両利きのあなたは、各々の手で二つのゲームを同時に行うことに決める。なぜなら、あなたは、ミサイルが同時に標的に当たりそうになる確率よりもどちらかのミサイルが標的に当たる確率のほうが高いと考えたからである。そして、あなたは一方の標的に当てた。

ブラットマンは、この事例を用いて、単純な説に次のように反論する。ゲーム事例で、あなたはミサイルを一方の標的に意図的に当てている。なぜなら、あなたはミサイルを制御しているからである。このとき、単純な説によれば、あなたは一方の標的に当てて意図している。もしそうならば、ゲーム事例の構造の対称性から、もう一方の標的に当てても意図していることになる。しかし、あなたは、両方の標的に当てることができないと知っているので、一方の標的に当てるという意図ともう一方の標的に当てるという意図を持つことは不合理である。よって、あなたが一方の標的に当てて意図していると主張する単純な説は誤っている (Bratman 1987, pp.113-115. [邦訳 pp.215-219.])。

本発表の目的は、ゲーム事例などの反例から単純な説を擁護することである。単純な説の魅力は、意図と意図的行為の関係を非常に簡潔な仕方で説明していることである。発表者の見立てでは、ブラットマンらにとって単純な説が誤っているように見えるのは、ブラットマンらが意図に対してあまりに多くのことを要求しているからである。たとえば、ブラットマンによれば、ある行為者の意図はその行為者の信念と整合的でなければならない (Bratman 1987, pp.30-31. [邦訳 pp.58-59.])。例を挙げれば、締切が過ぎて

いることを知っているにもかかわらず、要旨を作成することを意図するのは不合理だということになる。一方、発表者は、こうした要求は意図にとって副次的なものに過ぎないと主張する。その際に、McCann (1991) などを援用する。

発表の最後に、なぜブラットマンらが意図に対してあまりに多くのことを要求してしまったのかその原因を探る。原因の一つは、ブラットマンが、意図を論じる際に、意図と切り離して論じることのできる計画の合理性という主題を持ち出してきたことである。発表者は、こうした原因を踏まえて、より軽量級の意図の捉え方を提案する。この捉え方は、計画の合理性などから切り離されていて、意図に対してブラットマンらほど多くのことを要求せず、単純な説とも相性がよい。

参考文献

- Bratman, M. E. (1987), *Intention, Plans, and Practical Reason*, Harvard University Press. [『意図と行為——合理性、計画、実践的推論——』, 門脇俊介・高橋久一郎訳, 産業図書, 1994年.]
- McCann, H. J. (1991), "Settled objectives and rational constraints," *American Philosophical Quarterly* 28 (1), 25-36.